霊地への特別な秘境旅の跡を見る

－明治後期“塗駕籠”に乗って世界遺産・熊野古道を往く花蹊と“山林王”土井家との縁－

跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 観光デザイン学科 元教授
小川　功

1．はじめに

「分けのぼる山は峠に近づきて雲の上行く心地こそすれ」1）

これは『跡見花蹊女史伝』の巻末、遺稿の短歌集に収録された中で、一連の「熊野浦にて」「瀞峡にて」「那智の滝にて」と並んで、熊野一帯を旅した折に詠んだ秀作・四首組のうち、「矢の川峠を越ゆ」と題された一首である。

もとより文学を専攻する者でなく、本学の学祖・跡見花蹊の作歌を観賞し云々する立場からほど遠い一門外漢であるが、筆者はこの歌には強く惹き付けられ、今回花蹊の足跡を辿る文字通りの“跡見”旅を志した。すなわち「矢の川（やのこ）」という一般には馴染みの少ない難読地名と「雲の上行く心地」という形容詞から、とっさに筆者は大正15年開設された我が国初の旅客索道である紀伊自動車の「矢の川峠索道」の往時の姿を想起した。後述の通り「矢の川峠」とこれに続き昭和3年に「愛宕索道」が架けられた福岡市の「愛宕山」こそは筆者にとって一種の“聖地”だから、この歌の詠まれた時期や旅の経緯等を是非とも知りたくなった次第である。

幸いにして花蹊記念資料館のご好意により所蔵資料の閲覧を許され、本誌に執筆の機会も与えられた今回、花蹊の遺作の中から明治44年7月と40年9月に各々発表された「紀州瀞峡へ」「瀞峡の一日」2）の紀行文とその折の写生等を採り上げ、花蹊の向けた眼差しの先に存在したであろう明治後期の熊野地方という、往古の「蟻の熊野参り」の盛況とは程遠く物寂しい古霊場が醸し出す一種独特の神秘な世界を主観的に論じてみたい。

花蹊の旅程は後節に示す通り、その多くは平成16年7月世界遺産に認定され今日では人気の高い熊野古道そのものの熊野三山詣の巡礼諸ルートである「紀伊山地の霊場と参詣道」のうち、伊勢参宮者や西国三十三カ所の巡礼者らが険峻な峠を越え憧れの熊野を目指し紀伊半島を東回りした「東熊野街道」であった点がまず筆者には極めて興味深く感じられた。

すなわち旅の主な魅力は旅人自身にとって特別な思い入れのある目的地を目指して、特別な乗り物に乗り、特別な宿に泊まり、特別な人々と触れ合い、特別な風物を五感で楽しむといった数々の非日常体験の享受にある。しかしながら旅の感動は数値では計測不能な極めて主観的なもので、おそらく当時花蹊が“熊野古道”の険しい道中で難儀しながら感じたであろう事象の推測は極めて視野が限定された者の“管見”、すなわち遥か後年に、ごく一部分、大小の「雲取越え」を実体験したとはいえ、大部分の行程を近代的交通機関で楽々と通過一瞥したにすぎない筆者の乏しい現地体験（しかも約60年も経過したあやふやな記憶）等に基づく勝手な類推にすぎないことを最初にお断りしておきたい。（以下注記のない「　」内は当該紀行文からの引用）

II．熊野の近寄り難い神秘性

まず筆者が着目したのは花蹊が目的地・那瀑即ち那智の滝の風情を「古杉の森々として」と形容し、「此熊野路 山中枚□（櫂か?）森々として 千年も経たるもあり」（手帳）と驚いたほどの、森々たる奥熊野のいいようのない神秘性・秘境性・寂寞性である。その背景にある諸要因として考えられるものは古来熊野信仰の聖地、太古の熊野カルデラが生み出した奇怪なる地形などはいうまでもないが、土井早苗が「今更ながら不便の土地のはかなさをしみしみ覚へ候…この難処へはるはるの御はこひ戴き」（早苗）と礼状に述べた如く、当時の旅人にとっての交通接近上の徹底的な劣悪さをまず指摘しておきたい。試みに明治30年代に私鉄各社が誘客手段として盛んに発行した『沿線案内書』3）の類を一瞥しても熊野地方に言及するものは皆無に近い。最も近接するはずの関西鉄道、参宮鉄道にすら一切記載なく、『南海鉄道案内』を著すべく明治31年90日間も「摂泉紀の間を巡覧」した執筆者・宇田川文海も下巻の巻末で「高野熊野その他の御案内は更に又いたす事といたし」「是で御免」（同書,p157）と逃げた。また前稿で採り上げた如く、花蹊と親交あった跡見女学校教員・大和田建樹は明治33年5月大阪の三木佐助書店から『地理教育鉄道唱歌　第壱集』を刊行して以降、明治30年代に鉄道各線の鉄道唱歌を精力的に作詞していた。この“鉄道旅の元祖”も『第五集　関西・参宮・南海編』で「伊勢と志摩とにまたがりて雲井に立てる朝熊山」あたりで「今ぞめでたく参宮<鉄道編>をすまし」その先に続くはずの熊野を完全に省略、続く南海鉄道編でも道成寺で止め、文海に倣い「紀州名所は多けれど道の遠きを如何にせん」4）と難路を不参の理由とした。

一方、熊野の初期の紹介者の一人・花袋は「これより十数里の間…寒村荒駅旅客往々にして宿泊の家なきに苦しむ」（花

袋,P142）と警告するなど、観光整備が進まぬ当時の熊野路では少数の都邑を除き、専門の旅舎が乏しく、旅人は縁故で特別の“宿”に泊めてもらうほかないという、まるで近世以前の如き苦難の旅を強いられていた模様である。

このように不幸にも鉄道網から逸脱し、旅舎も乏しいため旅好きの文人達すら踏み入れることを遠慮した当時の熊野路は一般人が案内書を片手に気軽に行ける観光地の類とは程遠く、わけても奥熊野のそのまた最深部に潜む瀞八丁に至っては、荒行覚悟の修験者の目指す極限の奥駈道と同様、容易に踏破し難い秘境5）そのものであったといえよう。

筆者が所蔵する『沿線案内書』の中で瀞八丁に言及する例外は口絵2に掲げた『新宮鉄道沿線案内』で、新宮「駅より凡九里」熊野川を船で遡り、「四時文人墨客の清遊を試むるもの舟楫絶へず其名天下に響く」と宣伝する。しかし出版は大正2年で、この“離れ小島”的な新宮鉄道に乗車するためには、明治32年4月以降は大阪商船の大阪港～勝浦ほか各港～熱田港の航路に「世人皆紀州航路の険悪を説」6）くと酷評された通り、3日近くも外海で揺られ続け、更に勝浦駅から乗車46分でようやく起点の新宮駅に到達するという始末であった。

こうした中で花蹊は私鉄の雄・関西鉄道、参宮鉄道が国有化反対運動空しく揃って国有化され官軍の軍門に降った明治40年10月1日の約半年前の5月13日、私鉄黄金時代最期の両線に乗り起点名古屋から終点・山田に到達、そこから海陸両路で幾山川を越えた末に、ようやく念願の瀞八丁をはじめ「新宮に着 熊野権現速玉神社に詣て」（手帳）、「那智山西国一番観世音を拝み」（手帳）、熊野三山の聖地などを十数日もかけて悉く巡礼したのである。花蹊は「斯ういふ地（瀞八丁）をして、永久に静寂幽奥の勝を全くするといふ事は交通不便の賜」だと前述の如き熊野の秘境性をむしろ礼賛した。

公開された紀行文ではいきなり尾鷲から始まるので、読者は花蹊が苦も無く熊野に到達したように錯覚しがちであるが、明治40年6月発行の跡見校友会機関誌『汲泉』第16号には次号の紀行文掲載に先立つ形で花蹊が旅先で描いたスケッチ5点が恐らく旅程の順に収録されている。その第一が初航海の際、鳥羽の次に停泊し「風色又絶妙 所々写生」（手帳）した［図－1］「第一　船中より見たる紀州長嶌　花蹊」（汲泉16,P87）である。「汽船にて紀北に遊ふ者の第一上陸地」（案内,p254）である長島港は江の浦、名倉湾等付近の「海岸の風光甚だ絶佳なり」（案内,p254）とされ、おそらく「ひかきの鼻と称する勝地」（案内,p254）などが描かれているのであろうか。さらに紀行文で今回の旅で「少しも窮屈なことは感じません」としていたのに公開を前提としない備忘録では前述の「紀州航路の険悪」の様子も丹念に記録されている。花蹊を山田駅まで見送り、船で尾鷲に戻った直後の早苗の礼状に「汽船はかならず三時にまゐる筈との事と独りぼんやり待てど待てど例の通り又々延着後六時漸々乗船」（早苗）とあるような、当然に花蹊も痛感した常習的汽船延着なども恐らく意図的に省かれたものであろう。たとえば5月15日「此日の天気世になき晴朗なから旅船来らす失望す 錦浦館に一泊す」（手帳）と、到着の大幅遅延7）による船待ちを余儀なくされたり、17日は「雨又風終日 風雨不止…此處に一宿」（手帳）で、18日土井家との打合せで「此日昨日の□□<＊余波?>にとても船乗六ツケ敷と云□る」（手帳）と、悩まされ続け、24日「本日は汽船不来 浦を揮毫す」（手帳）と再度船待ち、翌日やっと乗船できても25日「八時、午下一時半大王海荒くるる 鳥羽三時着」（手帳）と、「狂浪奔馬の如く…壮快雄絶…他に見る稀なる所」（日本,p402）とされる大王崎の絶景も大シケに難渋し探勝どころではないといった具合である。それだけに16日「春日丸8）九時半出帆 予始て汽船にて航海す 天気ハ近頃になき晴朗 天の賜もの也」（手帳）と晴天下での汽船旅行初体験に感激ひとしおであった。

［図－1］「第一　船中より見たる紀州長嶌　花蹊」
（汲泉第16号,P87）

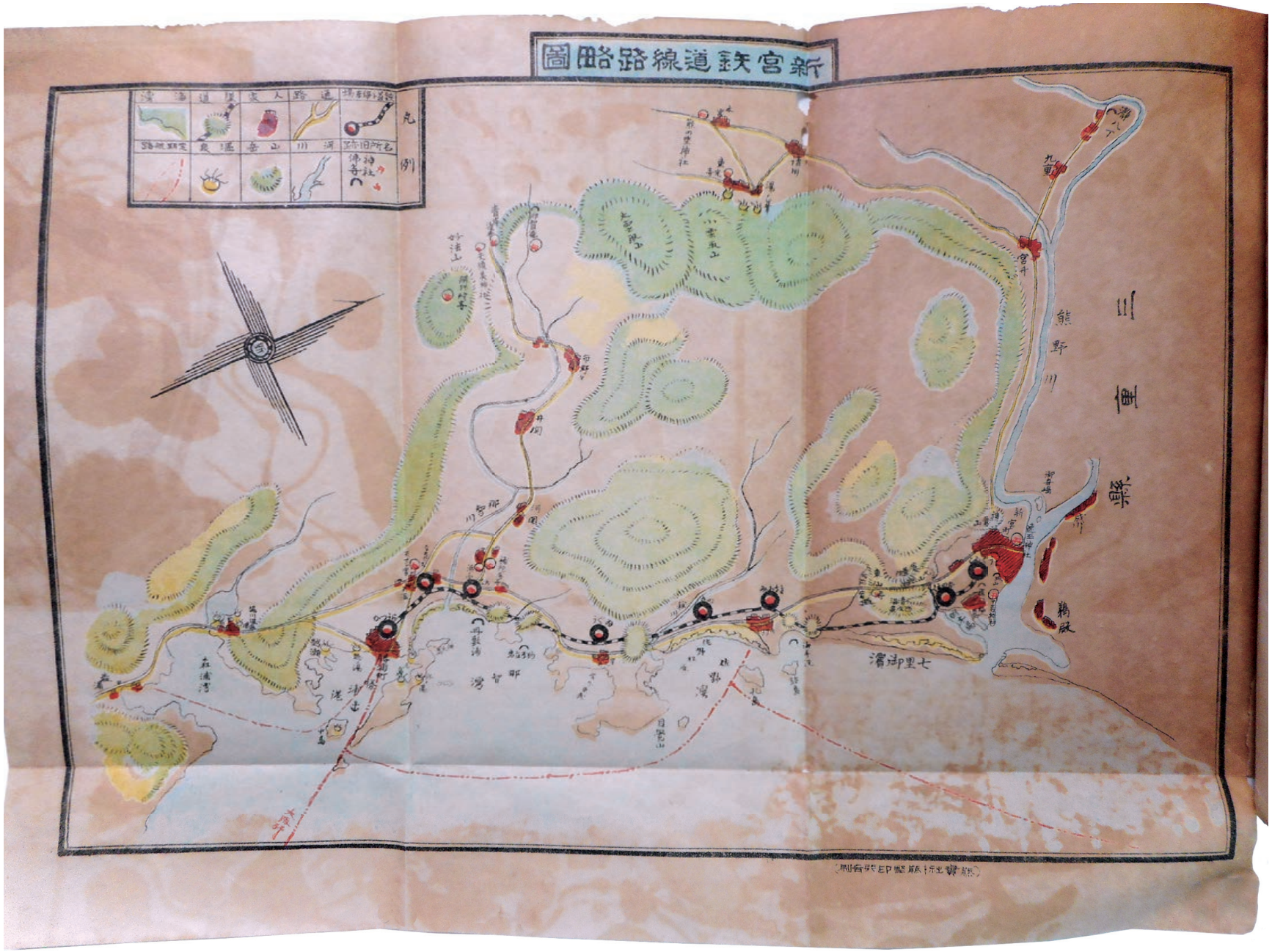
Ⅲ. 花蹊の旅程

1. 花蹊日記の空白を埋める熊野路の旅程

明治40年5月6日の日記に「来客土井早苗。咄しの席、那瀑見物を催されて、其つもりする。」翌7日「土井氏と同行之返事する」とあったのち、5月12日「辛酉　日曜　実業之日本、十年紀年祝、紅葉館にて午下一時。」を最期に日記の編纂者注に「（五月十三日～三十日、記載ナシ）…（六月一日～九日、記載ナシ）」とあり、この日以後何らか特別の事情に基づく日記の長期空白を示している。

平常通りの記載が再開されるのは、なんと六月十日からで、「書至、閑院宮妃殿下、土井早苗。」とあるが、日記には長期空白の理由を示す「那瀑見物」云々は一切登場しない。

跡見校友会誌『汲泉』第17号には「約二週日に亘る」「紀州旅行」帰宅直後に花蹊から「面白いお話を伺」った記者「星



花蹊が訪れた6年後に勝浦〜新宮間が開通した新宮鉄道線路略図（『新宮鉄道沿線案内』大正2年所収）

池」（『汲泉』編集者 牧野誠一か）の挿入した前文では「花蹊先生は去る五月十三日当地を御出発になって伊勢路より紀州に御旅行になり、其月の廿七日無事御帰り…」（汲泉17,P20）とある。

この大旅行のために生じた日記の長期空白を埋める好資料が花蹊記念資料館所蔵の花蹊のフィールド・ノートたる『花蹊手帳1906』であって、『をりをり草』掲載の紀行文からも省かれた全体の旅程概要を『手帳』及び早苗の礼状の記述から資料館の職員各位のご支援・御協力の下に再現してみよう。（原文は「午下〇時」との表記であるが、後年の時刻表の標準たる24時間制に統一）

明治40年5月13日08:00新橋発から5月26日21:00新橋着までの今回の熊野路の旅程等が以下のように花蹊自身の筆でこと細かく記されている。花蹊が利用した旅館名などは筆者が観光経営専攻ということもあり興味深く調べて注記を施したが、全て当時の資料で所在等が確認できるなど、極めて正確に恐らくその都度丹念に記入されたことを窺わせる。

5月13日（晴）

「午前八時急行9）午後七時津着 正午十二時汽船

十三日午前七時出門 □□子 正子 石山 浦御夫婦 角田夫婦 其外見送る人々大勢にて八時出発す 天気殊に晴朗

平沼 戸塚 程ケ谷（保土ヶ谷）〇戸塚 大船藤沢 茅ケ嵜 平塚大磯 二ノ宮 国分（ママ）津停車…（以下略）…」（手帳）

恐らく「最急行」初乗車の花蹊は停車しない通過駅を含め、駅名（確認不能は〇で表記）を次々と几帳面に『手帳』に書き留めていくという驚くべき乗り物好きの“特技”を発揮していくのだが、かかる特異な性向の解析に関しては慎重を期して別の機会に譲り、以下は旅程部分のみを簡潔に手帳から抄録する。（宿泊した旅館等に関してのみ注記を施した。）

沼津停車、「浜松停車、金谷より食事始る」とあり、「食堂車附」との表示ある「最急行」連結の食堂車を利用か。「名古屋停車乗替関西線」04:40発、亀山乗換、20:00参宮鉄道津着、「岡宗太夫旅館」10）着、泊。

5月14日（晴）

09:00津「岡宗太夫旅館」発、関西共進会見学、13:53参宮鉄道津発、車窓から「阿漕ヶ浦」（手帳）を写生し終点山田着、伊勢電気鉄道の電車11）で二見へ、16:25二見「朝日館」12）着。

5月15日（晴）

10:30人力車で二見「朝日館」発、12:00鳥羽「錦浦館」13）着、昼食後日和山に登り写生、「汽船来らす失望」「錦浦館」泊。

5月16日（晴）

09:30大阪商船春日丸で鳥羽港発、初航海で長島など写生、18:00尾鷲港着、土井邸泊。

5月17日（大雨）

10:00尾鷲小学校等を見学後、土井氏別墅で画揮毫し泊。

5月18日（晴）

竹林等を見学後は終日揮毫。早苗は「御旅路の御つかれも御厭はせなう沢山の御揮毫いただき…」（早苗）と感謝。

5月19日（晴か）

05:00土井邸を塗駕籠で出発、矢の川峠で昼食、人力車に乗換え、不二、大俣、小俣を見て評議峠茶屋で休憩、18:15木の本「酒甚」14）旅館泊。

5月20日（晴）

06:00人力車で木の本「酒甚」発、鬼ケ城、獅々嵜、花の窟・王子岩に参詣、有馬村の有馬松原、市木川緑橋、尾呂志村東孫三郎邸で午餐、小川口で乗船、瀞峡下八丁を探勝、夕刻に田戸の玉置基彦邸（瀞峡亭）に泊。

5月21日（晴）

08:00船で田戸発、瀞峡上八丁を探勝、九里峡を経て17:00新宮着、速玉宮参詣、「油屋」15）泊。

5月22日（晴）

朝小畑勝と面会。09:00人力車で「油屋」発、那智へ、途中「白菊か浜」16）を写生し、五里山上から那瀑を見て那智山参拝、勝浦「渚屋」17）で夕食。21:00大阪商船三重丸で勝浦港発。

5月23日（不記載）

08:00尾鷲港着。土井邸泊か。

5月24日（晴）

尾鷲土井邸で船待ち「浦を揮毫す」。

5月25日（晴）

05:30大阪商船和歌山丸で早苗らと尾鷲港発、08:00長島港発、13:00「海荒くるる」中を大王崎通過、15:00鳥羽港着、東京から呼び寄せた甥の泰と合流、錦浦館で休憩後、18:00人力車で二見へ。伊勢電気鉄道の電車で山田着。駅前「油

屋支店」18）泊。

5月26日（晴）

07:20早苗に見送られて参宮鉄道山田発、亀山で関西鉄道に乗換、「終日の御乗車御疲れのほどもさぞかし」（早苗）のためか途中駅等の記載一切なく、名古屋で官営東海道線に乗換、21:00新橋着。山田で別れた早苗は鳥羽港18：00発、尾鷲港翌朝04：00着。

2.「矢の川峠」以降の詳細な行程

ハイライト部分の「矢の川峠」は文末Vで詳述するので、ここではそれ以降の行程を紹介したい。

○「五月十九日」

花蹊は「木の本迄十一里 矢の川峠に上りて不二大俣小俣を見る 矢の川峠にて弁当を食ふ ヒヤウゲ峠19）茶屋に憩フ」（手帳）と書き留めた。

「午下六時十五分木の本酒甚旅館に着す」（手帳）

○「五月二十日」

「朝の六時に木の本」を俥で発車、「鬼ヶ城獅子嵒花の窟…参詣」し、各所の故事来歴を熱心に聞き取り、古歌も紹介している。

有馬にある神代の名蹟・花の窟神社で、海岸沿いに新宮を目指して南下する浜街道と、花蹊の通った本宮を目指す本宮道に分かれる。花蹊の参詣した鬼ヶ城、獅子嵒、花の窟、王子岩および有馬松原はいずれも『熊野百景写真帖』等に収録された景勝地であった。このうち鬼ヶ城は筆者も遊んだ著名観光地だが、不勉強であった花の窟はいかなる“流行神”かと郡誌を紐解くと、特に由緒等を多く記載し、花蹊お気に入りの花の窟神社では折しも盛んに社格昇進を運動中であったことが判明した。明治34年5月東久世伯爵を会長に戴く保存会を設立した事情（郡誌上,p604）を花蹊も事前に認識していた模様である。なぜなら花蹊は花の窟神社の項で、「昨年でしたか、東久世伯が、神社保存の為に御来遊20）になった」と記しているが、事実明治39年10月東久世伯が熊野を訪れる計画(直前に中止)があったのである。明治36年4月30日から「花窟保存金を全国に向って募集」（郡誌上,p604）を開始した際に、全国婦人組織21）経由で花蹊自身も勧誘を受け、瀞以外に目的地の一つとして期待していた可能性もあろう。

木ノ本から新宮にかけての「約六里半は所謂七里御浜街道にして坦々たる道途」（郡誌下,p342）である。手帳には「有馬松原迄行 左は熊野海岸果なし 大平洋を□□□る」（手帳）と大平洋に感激し、道沿いの有馬松原を「海浜で…松林が数里続いて殊に絶景の地」と賞賛し「千歳をのぶる心地こそすれ」と詠んだ。ここは江戸時代の新宮城主・水野重仲が防風林として植林し、江戸時代の記録「熊野見聞記」では南北34町、東西に2町40間もあったとある。

手帳には「有馬松原過て志原橋 木の本より阿多和迄四里十四丁」（手帳）とあるが、浜街道と本宮道の分岐「処を過ぎ…有馬村…有馬松原…市木川緑橋を渡り」、ここでも「名にも似ぬ一木の里」は松原が続き「かぞへも尽されず」と詠んだ。市木川の河口にある緑橋は明治30年代に初代の木橋が架設され、幸い花蹊も無事に渡ったが、その後高潮で流失した。「該橋の工事成らざる以前…海潮襲来の為…宿年の問題」（郡誌下,p328）となり、大正7年ようやく石造で再建された立派な旧橋が記念物に指定され、現役で使用されている。

神木流紋岩が敷き詰められた石畳の本宮道の横垣峠道を過ぎ、「此処から尾呂志…へ出…富豪東孫三郎氏を訪ね…此家で午餐の饗応を受けた」

風伝峠道は海辺と山村を結ぶ往時の要路で、尾呂志荘の領主・尾呂志孫次郎が当地に尾呂志城を築いた。「其後城跡は民舎となりしも、石垣及び堀の一部尚存せしが、明治四十年尾呂志尋常高等小学校を此処に建築」（郡誌下,p44）した。花蹊は東邸の庭園を観賞し「三方は皆山で囲まれ、風伝山…は恰然屏風を列ねたやうで…実に画中の楼閣」と絶賛したが、尾呂志の地名も「土地高きを以て風常に烈しく吹き下ろす故に颪の名あり」（郡誌下,p44）とされ、城の名残りをとどめる巨石、土居、井戸が今なお残る。東邸（尾呂志村上野540番地）

［図－2］「第三　奈良県吉野郡瀞峡之図」（汲泉第16号,P95）

は岩崖の多い風伝山の東方、高千良山の南に当たり、尾呂志神社や寺も存し、旧街道が通る旧城跡近くかと推測22）した。

この日の旅程は海沿いの平坦地が多くて難路もなく、しかも神代以来の遺風が随所に残る名所旧跡、山河草木いずれも花蹊の気に入り、「何とも申されない絶景」の連続で大いに満足し、次々と快心の和歌が生まれたようである。

「尾呂志から二里半…北山川の側なる小川口に出…此処で…船を一艘命じ」、入鹿村小川口から乗った船で瀞峡を探勝し、ここでも「実に言葉にもなんにもいひあらはすことの出来ない絶景」を「私も筆を取って所々を写し…一日の清遊を果し」た。

［図－2］は、その際の作品の一つ「第三　奈良県吉野郡瀞峡之図」（汲泉16,P95）である。わざわざ奈良県吉野郡と冠したのは、ここ田戸が三重県でも和歌山県でもない事実を知って、その希少性を示したのであろうか。花蹊の「厳の上の方には老松に藤の花がからまり」「岩山の上には、古木の姿の面白い緑の松に、藤が這ひまつはって」いる絶景の熱心な写生風景は地元小川口の少女によって目撃されていたことが判明した。

「瀞ホテルの前方、三重県領の山林中に枝葉上部にのみ繁り、8、9部あまり、その幹を露出したる大いなる松あり。同（花蹊）女史之を見、いたく喜び、之を写生せりと云ふ。（母の話、明治37年頃か）但し、今は枯れ木して果て、その影尋ねるよしもなし」23）

これは地元の医師が母から昔聞いた明治37年頃の話として日誌に書き留めた一節で、憧れの目的地に到着した写生好きの花蹊の至福の一瞬を活写した貴重な証言である。「県に天下の智勝であつて地僻遠の為に訪者少く、北端にある瀞亭等の旅舘も筏乗りの外投宿する者の多くない」24）など、遠方からの探勝者が少ない時代、稀な女性・花蹊の自由闊達な行動を同性の少女がおそらく畏敬の念で見詰め、後年子息に自慢話として語って聞かせたのであろう。「瀞ホテル」が盛業の中で“花蹊の松”が現存しないのは残念だが、子息も確実に内容を記憶していたということは、当時の「跡見花蹊女史」の盛名のほどを偲ばせるものがある。その後、田戸の「瀞峡亭主人」「玉置…基彦氏」邸で「晩餐」。

去る5月6日土井早苗から誘われ、同行を返事した「那瀑見物」の最終目的地である「那智の滝にて」の二首を詠み、［図－3］の「第五　那智山一ノ滝」（汲泉16,P100）を描いた。この原画と思われる「那瀑」が手帳の両開き2頁に収録されており、旅先でのラフなスケッチを基に加筆修正して完成させていく花蹊の制作過程が判明する。文学作品として花蹊の熊野路紀行は土井邸を塗駕籠でいざ出発するところから始まり、この旅の目的地である那智宮参拝で終わっている。

［図－3］「第五　那智山一ノ滝」
（汲泉第16号,P107）

Ⅳ．花蹊と交流のあった人物像

文学専攻ではない筆者には由緒ある熊野古道を往った花蹊の芸術的な感動を的確に伝達するだけの見識を欠いている。そこで経済・経営専攻としての性で、この旅で花蹊を暖かく迎え入れ、格別なおもてなしをして喜ばせるなど、深く交流のあった地元の人々を筆者なりの視点から今回の旅の流れの中で位置付けてみたい。

1）浦早苗

［図－4］土井早苗

昭和50年4月9日井上幸子先生ご寄贈の写真に李子先生、雨宮信子、原田富士子と一緒に撮った「茸狩（原田氏山にて）」での土井早苗（中央立像）の写真が資料館にある。

花蹊の旅の動機というのがふるっている。すなわち「私の学校の卒業生の旧姓浦早苗さん」の嫁ぎ先「土井家…夫婦が博覧会見物に御上京になって、御帰りの時に是非に一緒にと御誘ひを受け…かねての望みですから俄に」宿願の熊野詣に大急ぎで出たとするのである。

［図－4］　土井早苗　（茸狩〈原田氏山にて〉井上幸子氏寄贈）

浦早苗は明治7年5月和歌山県出身の浦春暉の二女に生まれ25)、父が大蔵省記録局長時代に跡見に入学、明治24年4月卒業生総代として全科卒業後、「土井藤右衛門氏夫人」26）となり、父が病死した明治29年当時は土井早苗子として「三重県北牟婁郡尾鷲町字南浦」27）に在住し、一族の栄子、つるの子ともども大日本婦人衛生会員であった。

この博覧会は明治40年3月20日から7月31日まで上野公園付近で開催された東京勧業博覧会のことである。同年に予定されていた政府主催第6回内国勧業博覧会が日露戦争後の財政悪化により延期されたため、これに代わるべき地方博覧会を東京府が開催したのである。これとは別に明治40年4月1日から5月30日まで三重県津市の偕楽公園付近でも第9回関西府県連合共進会という名の地方博覧会が開催された。花蹊は5月7日に東京、5月14日には津の「関西共進会場に行 案外ノ盛大ニテ 可驚　物品陳列もよく見物し 一号<館>と参考<館>を見て公園ニ休憩して 売店を見て帰」（手帳）るなど、相次いで両博覧会を熱心に見学した。この時期「東京博覧会開期中各鉄道会社割引一覧表」28）によれば鉄道作業局、関西鉄道、参宮鉄道等で「出品人割引二割」の特典を付しており、4年前第5回内国博を大阪まで見に行くなど好奇心旺盛な花蹊ではあるが、連続しての両博見学には土井家夫婦側の固有の事情があると推定される。すなわち、土井本家は4年前の第5回内国博に出品、名誉金牌を受賞しており、津の共進会の開催そのものにも深く関与29）していた。

筆者の推測だが、土井夫婦の上京は一観光客としての単なる博覧会見物にとどまらない任務が伴っていて、本稿主題の花蹊同伴の熊野路の旅行も永らく「絶勝不幸にして文士の之を記するなく」30）世に知られざる瀞八丁の景勝を、恐らくや花蹊の筆で画で広く世に知らしめたいとの、美しい師弟愛を超えた土井夫妻の熊野地方の地域振興31）への熱い思いがあったようにも想像される。早苗の礼状にも「只瀞のけしきのみをしばしの御記憶に留めさせられ又の御出を…奉待候。尚思しめしよらせ給ひし御方々へも御勧めを願ひ候」（早苗）とあり、花蹊自身もそれに応える形で、明治40年9月、44年7月の二度にわたり紀行文を発表、さらに大正4年の『をりをり草』の巻末に、少なくとも一篇は別の場所でもよかったと思えるのだが、同じ瀞八丁を紹介した当該二篇を揃って掲げ熊野路の周知に寄与した。

「俄に」思い立ったことを示すように5月6日来訪した土井早苗との「咄しの席、那瀑見物を催されて、其つもりする」（手帳）、翌7日には早速早苗宛「土井氏と同行之返事する」（手帳）という、驚くべき即断、即決ぶりであった。いうまでもなく花蹊は現役バリバリの教育者であり、いわば今日風でいうなら学園の理事長・校長・教務主任等を全て兼務する超多忙な身であった。しかも行く先の熊野は観光客を容易に入れぬ難路続き、明治末期のご時世ではとても一般的に御年68歳の高齢女性の旅行先とは認識されぬ僻陬の奥地といってよかったであろう。少なくとも今の筆者には3年後に沈没するような400トン未満の小型木造船で外海の太平洋を航行するほどの勇気はなく学祖に脱帽するしかない。

しかし家族ら周辺の心配をよそに公私両面の万障を繰り合わせ、あらゆる不便・不都合等を堪え忍んでも熊野は平安貴族と同様、花蹊にとって「かねての望み」、すなわち強い憧れの巡礼の地であり、一生に一度は詣でることを運命付けられた約束の地であったからにほかならない。たとえば跡見女学校を卒業した南画家波多野華涯32）は明治16年春、画の題材を求め南紀を巡る旅に出て、瀞峡に遊んだとされ、土井早苗以外にも当地にゆかりのある卒業生の消息等にも刺激を受けていた可能性もあろう。なお熊野の旅の途中、5月15日鳥羽では「稲垣銑子33）様御迎ひに来れて 七八年振の会合」（手帳）を楽しみ、22日朝にも新宮町油屋で卒業生「小畑勝女来昨夜より今朝迄三度此屋に来り始めて面会」（手帳）するなど、当地在住の跡見生達との交流を深めている。

2）田戸村の玉置基彦

紀新銀行取締役齋藤敬一とも縁戚関係34）ある「玉置氏といふ豪家のお宅」は「瀞八町を越えたところ」（田戸村大字神下）の「崖の上にあって、実によい眺め」の場所に建っていて、井上円了も「同氏宅は瀞峡の上流にありて峡内を一瞰するに妙なり」35）と同じ印象を受けている。

花袋も明治31年現地で「瀞の奥なる田戸…には旗亭は二軒までもある」（花袋,p160）と聞いていたが、「来て見れば案外にも、材木商と、荒物商と、郵便取扱所と、各一戸の外は、二三の農家あるばかり」36）の僻陬の地であったという。後年「有蔵集落から来た人であろう」現当主の曾祖父（東覚治?）が大正6年前身の筏師の宿「あづまや」として創業したと伝わる「瀞ホテル」（十津川村田戸神下405番地）が建つ絶景ポイントと玉置家、あるいは材木商、荒物商、郵便取扱所（神下398番地2）との相互の位置関係は現時点で未詳37）だが、地番からみて極めて近接関係にあることは想像できる。

玉置家自身が保勝会や旅舎とどう関わったか未解明だが、花蹊の『手帳』には「田戸玉置基彦氏に一泊す。瀞峡亭主人の為に」（手帳）との漢詩が記載され、一泊した玉置基彦＝瀞峡亭主人とも解される。しかもその詩には「為瀞溪保勝会揮」と添えられているので、玉置自身が景勝地に建つ自邸を瀞峡亭と号し、「瀞溪八勝」の振興目的の「瀞溪保勝会」38）を構想して花蹊に探勝記念の揮毫を依頼したと見るのが自然であろう。花蹊の訪問は正に「頃者郡内の有志瀞峡保勝会を組織し、遊艇腕車旅館の設備を整へ都人士探勝の便を謀るの挙あり」（案内,p258）との時期に当たるので、瀞溪保勝会＝瀞峡保勝会と見做せば玉置らこそ推進者たる「郡内の有志」となろう。

後に目論見通り筏師の宿が田戸地区の主力産業となったことから、筏師を使役して、花蹊の見たように「流域から筏を沢

山流して来」る立場の瀞上流域の山林王・土井家に相当の敬意を払っていたことは、「主人の基彦氏は両三日前から待設けたといふて、喜んで一行を迎へられて、晩餐を饗せられ」たとの花蹊の筆からも窺える。

3）尾呂志村の東孫三郎

花蹊はこの旅で勧進元の土井家を始め、泊めてもらった前項の玉置家など多くの地元有志の歓待を受けて感激した中で、饗応を受けたが泊まってはいない東孫三郎家に多く言及している。花蹊がこの日の午前中に訪ねて感銘を受けた前述の花の窟神社の保存会を明治34年山崎亀之助らと発起（事業,p212）したのも東その人であった。「元禄ノ頃上野村ニテ大庄屋ヲ勤メタ」（郡誌上,P643）東勘兵衛との系譜上の関係は未確認ながら、「尾呂志村の東孫三郎は同地方に於ける門閥家にして代々林業を事とし」（郡誌下,p299）、米穀肥料商（興信,p57）等も営み、明治30年10月南牟婁郡会議員に当選・郡参事会員（郡誌上,P588）、明治30年12月三重県当局を主体に設立した特殊銀行の三重県農工銀行に地域を代表して監査役39）に選ばれ、明治43年南牟婁郡内で初期に設立され規模の大きな産業組合である尾呂志信用購買販売組合理事等の名誉職多数を兼ねた。1000町歩以上所有の山林業者40）で、所得税25円以上を納める“紳士”として明治28年発行の『大日本紳士鑑』に尾呂志村で唯一人掲載された「郡内屈指の豪家」41）で、大正７年の営業税額は32円、所得税額は35円であった。（興信,p57）

同じ林業家として長年友誼を深めていた土井家一行に「今晩は是非一泊してくれなどと申され…東氏は特に瀞峡の案内者として執事某を附けて下さ」るなど、数々の好意を示した。庭に往古の巨石、土居等も巧みに配された「この家は家屋庭園は申すに及ばず、何れも善美を尽した構へ」とベタ褒めした住まいも尾呂志城跡に真近く、恐らく旧蹟を邸宅に継承し、名前も尾呂志城主と同じ孫三郎を名乗る、郷土の模範42）たる名望家の生き様に花蹊は好ましい“古武士”の姿を見い出したのかもしれない。

4）尾鷲の土井家

玉置を「豪家」、東孫三郎を「富豪」と評した花蹊は、旅の招待先である土井家を単に「伊勢の豪家の土井さんといふ方」と、さらりと紹介するにとどめるが、尾鷲に逗留した5月18日の手帳では「土井八郎右衛門氏名物の竹林を観て藤右衛門氏に宅に帰ル」（手帳）と控えており、本家・分家双方の距離感も実感していた。

後述の如く、土井家は並の資産家とは比較にならぬ別格の存在で「東の諸戸、西の土井」と言われ、「一門の所有に属する山林は…広大にして主人猶其の境域を知らざるものあり」（案内,p249）と驚嘆された山林王のご一統である。

江戸の頃より尾鷲で林業を中心に繁栄してきた土井家は天保10年の文献にも「和州領北山辺の山林多く持ちて国中の富豪の一なり。別家源兵衛及其余多くあり」43）とされた。林業一本で「土井本店」を名乗った本家筋の土井八郎兵衛（尾鷲町大字尾鷲南浦360番地、電話長２）は三重県の多額納税者1,151円、尾鷲銀行の頭取①724株12.1％で、大正７年の家業は製材業、営業税額140円、所得税額7,714円（興信,p57）であった。一族は揃って山林業に従事し、明治40年度の所得税額＜（　）内営業税額＞では八郎兵衛977.80円（159.85円）、藤右衛門416.32円（49.08円）、忠兵衛210.27円（21.96円）、与八郎61.08円（42.50円）であった。

「土井本店」に対し「カネ吉・南土井商店」44）を名乗った土井藤右衛門（尾鷲町大字尾鷲南浦455番地、電話長３）は明治元年先代の長男市松として生まれ、郵便局長、明治23年12月家督相続、家業の林業、醤油醸造業に従事、大正７年の営業税額66円、所得税額2,911円であった。尾鷲銀行常務④354株5.9％、尾鷲郵便局長、憲政黨所属三重県会議員（北牟婁郡選出）等45）を兼ねた。なにより当時希有な電話の番号が町役場１番、八郎兵衛２番に次ぐ３番というのが地域での立位置を端的に示していよう。

花蹊が訪れたころ土井家に代表される尾鷲林業が最盛期を迎え、当主は「従来の運材方法の外、鉄索、軽便軌道等文明の利器を採用し、挽材工場を設け」（事業,P172）るなど本格的な離陸期に該当する。まさにその時、明治36年７月１日土井八郎兵衛は大阪で開催された第５回内国勧業博覧会46）の林業館に出品中の『林業ノ方法』で博覧会総裁載仁親王から「夙ニ父祖ノ遺業ヲ継ギ…殊ニ近来、新式ノ運搬装置ヲ設置シテ、天然林ノ利用ヲ開キ、或ハ鋸機械工場ヲ建設シテ、製材ノ改良ヲ図」47）ったと名誉金牌を授与されたのであった。

Ⅴ．旅の非日常性の検証

ここからは花蹊が実際に体験した旅の非日常性は何であったのか、また彼女が時代的に体験し得なかったものにはどんなものがあるのかを筆者なりの見解として矢の川峠越えを例に述べたい。

1）花蹊の乗った特別の乗物

「瀞峡へ参ります前日…同＜土井＞家」を出発する情景を花蹊は「朝五時出立 予 鶴子48）乗物にて行」（手帳）と「乗物」

の二字を手控えた。

「始めての遠き御旅行」（早苗）を経験する鶴子はもちろん山道に慣れない客人である女性二人のため今回土井家が特別に用意したその乗物こそなんと「立派な引戸の付いた昔風の塗駕籠」であった。花蹊、姪の鶴子、土井夫婦に従者8名からなる「此日行者十二人外に見送り人数多一里計にして歸らむ」（手帳）と書き留めた。花蹊は「路には村の人達が、土下座せんばかりの姿で並んで」、まるでお殿様49）然とした当主一行のお駕籠を見送る様子に好奇の眼差しを向けたのである。花蹊が「まるで葬式のやうな感じ」を受けた理由は多数の村人が紋付き袴姿ではないにせよ、①改まった身なりで、②静粛かつ、③整然と、④一行につき従って約4キロも村外れまで粛々と見送る野辺の送りと見紛う未体験の“公式行事”に遭遇したからであろう。

県境を越え奈良県側の紀伊山地の奥深くまで広大な山林を所有し、「一門の所有に属する山林は…面積広大にして主人猶其の境域を知らざる」（案内,p249）ほどの名だたる“山林王”50）が取り行う、まだ見ぬ持山巡視とでもいうべき恒例行事なみの行列風景を彷彿とさせる。

筆者はこの記述を見た際まず、大正15年8月御年88歳の大倉財閥当主・大倉喜八郎老人がパルプ原料林として新たに購入した世襲財産の「険峻世に聞えたる赤石岳」登頂を目指し、新道を拓き、山小屋を建て山駕籠に跨がって家来衆を従え、無事初検分を果たしたという本邦登山史に残る一大イベント「大名登山」51）の破天荒な映像を想起した。

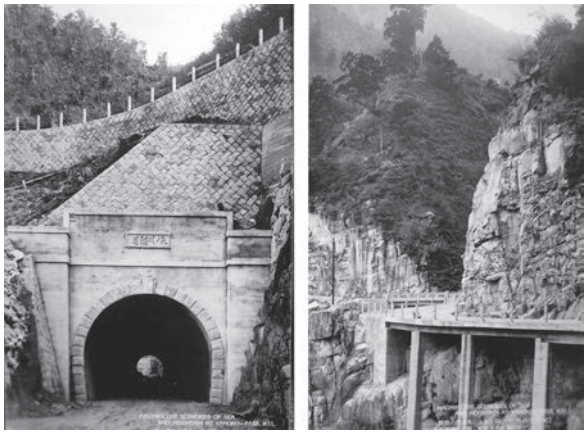
江戸時代に生育し、明治3年供の者と東海道を徒歩で12泊13日もかけて「東行出立」52）し、当然ながら歩いて箱根も越えた“旧人類”花蹊も当初は「私は駕籠といっても、多分山駕籠であらうと思って、不思議にも思って居りませんでした」が、「翌朝玄関へ出て見」てビックリ仰天、不思議に思った花蹊が由緒を聞き出すと「その駕籠は、同家へお嫁入りのあった時、花嫁さんが乗って来たもの」で、「私はほんとに珍らしい面白いことと思ひました」とサプライズを特筆している。

花蹊は山行の天候回復、帰路の船待ちのため、2度にわたり尾鷲の土井家に長逗留した関係上、同家の話を夫妻・家人等から存分に聞かされ、また土井八郎兵衛別邸の「名物の竹林53）を観て藤右門氏に宅に帰ル」（手帳）など、尾鷲の内外を何度か通る際に自然と同家関連の邸宅・地所はもちろん内国博で受賞したばかりの新鋭林業施設等の偉容も色々と目に入ったはずだが、なぜか一切言及していない。

この“山林王”は尾鷲に本店を置き、周辺の広大な山林を所有して運材軌道・索道等を敷設、当時製材所を起こしつつあり、その後順次整備されていく坂下、八木山等の各林用軌道、丸三索道組、尾鷲索道、北山索道等の各索道会社（拙著.P123～127）にも大株主・役員として幅広く関係した。当時、尾鷲の土井家といえば伊勢の山林王として相当著名な存在で、単に一言「豪家」といえばすべて事足りたのかも知れない。また紀行文の最初の掲載誌が校友会機関誌ということもあり、万事が控え目な同家サイドの意向も勘案、教育者の立場で特定家庭の財力誇示に繋がる表現は努めて避けた可能性もあろう。そんな状況で巧みな画家でもある花蹊はいかにも由緒正しい家柄を暗示する「昔風の塗駕籠」に乗り、「村の人達が土下座せんばかりの姿」だけをさりげなく紹介し、あとは読者の想像力を掻き立てる独自の“画法”を採ったのかもしれない。もちろん「土井氏は…写真機などを取り出して写されて居り…私等は皆その写真の中へ入ったのです」と花蹊を喜ばせる様子など、明治期には高価な個人用写真機で趣味の写真を撮る贅沢な生活の一端は描いてはいるが。

2）花蹊が駕籠で越えた特別の峠

熊野古道を彩る数々の由緒ある峠群のうち、旧蹟も豊富で愛好者も多いメジャーな峠ではなく、現在三重県立熊野古道センターが「世界遺産である江戸道をお通り下さい。明治道は歩かないで下さい」と忌避する禁断の「明治道」の「矢の川峠」の方を本稿ではあえて採り上げたい。よほどの旧好きでも実際に徒歩で越えた者は少ないと思われるのが、天下の難所として名高い伊勢・熊野を隔てるこの「矢の川峠」の険である。［図－5］ははるか後年の昭和11年開通した「矢の川隧道」と鉄道省営自動車が走る観光用絵葉書である。



［図－5］ 昭和11年開通の「矢の川隧道」絵葉書（筆者所蔵）

こんな嶮しい山道を例の塗駕籠に揺られて旅した花蹊は「焼山峠54）を向ふに見て、矢の川峠を越し」、峠越えの様子を手帳に「此熊野路 山中枕櫂 森々として 千年も経たるもあり 谷川の流れに添て行 □□嵜□55）ハ絶景存し 此景色□としつゝ 実に夢の心地□らる」（手帳）と具体的な地名などもその都度聞き取って克明に記した。

ここで花蹊は冒頭の「分けのぼる山は峠に近づきて雲の上行く心地こそすれ」と「矢の川峠を越ゆ」と題された問題の一

首を詠んだ。つまり筆者が考える熊野路の旅でのハイライトこそは、遠くに熊野灘を行く小舟の帆を望み、近景には葉先が鋭く尖がった枝が何本も生え揃う杉の大木が真っ直ぐに急斜面に立ち並ぶ一方で、傍らには移植されて間がない幼木も健気に根付いている土井家の植林風景が描かれた［図－6］の「第二　熊野矢の川峠」（汲泉16,P91）ではないだろうか。もちろん文章には前述の通り土井家の山林業への言及は一切ないが、花蹊の両目にはっきり把握され、そして絵筆で巧みに表現されたものかと思われる。花蹊のいう「山中杣櫂 森々として」の字句もこうしたスギ林特有の光景を表現したものか…と解される。

跡見李子編纂『花のしつく』（花蹊記念資料館所蔵）には熊野一帯を旅した折に詠んだ秀作の中から「熊野浦にて」一首、「瀞峡にて」一首、「那智の滝にて」二首、「矢の川峠を越ゆ」三首、「花の窟に詣でて」一首と題された合計八首が掲載されているが、花蹊自身の感銘がことのほか強く、「実に夢の心地」「雲の上行く心地」に陥ったためなのか、「矢の川峠を越ゆ」は実に最大の三首も選ばれている。

［図－6］「第二　熊野矢の川峠」（汲泉第16号,P91）

3）「矢の川峠」選択の理由

明治後期において伊勢から熊野への陸路は①八鬼山を越え新鹿を経て木ノ本に至る約11里の「左右ニ曲折、路頭岩石ヲ以テ築キ最モ険ナリ」（地誌,P330）とされた海岸寄りの険峻な「旧道」と、②矢の川峠を越え大又、小又を経て木ノ本に至る約13里の「大又越」の、少なくとも２ルートが存在した。

①の古来の「八鬼山越」は史跡も多く、石仏に出会い、絶景も望めるが、海岸沿いの尾鷲を出て、海抜ゼロからいきなり標高653mの八鬼山峠を登るので勾配がきつく巡礼者を苦しめ熊野路一の難所といわれた。

ではなぜ花蹊らの一行は①の史跡が多い八鬼山越えを右手に見て、熊野古道センターのご指導に反して推奨されない②の矢の川峠の方を選択したのであろうか。

それは花蹊が旅を企画する地元精通者たる土井家側から「途中は俥が通はないから、俥のあるところまでは駕籠で（往く）」と聞いたことにヒントがある。①の難所を避け ②の矢の川峠を越える「明治道」と呼ばれ、おそらく「道路開鑿に費を投じ」（事業,P172）たとされる土井家等を筆頭格に尾鷲の有力者達も開鑿の挙に関わった新道が明治19年に着工、尾鷲～矢の浜～二ツ木屋～大橋～七曲り～小坪～矢の川峠～大又～小又～評議峠～木ノ本間が竣工済みだったからである。しかし「七曲り」と呼ばれた大橋（後の矢の川索道起点）～小坪（後の矢の川索道終点）区間は約500mもの標高差があり、明治21年「一度改修されて車道となりしも、勾配急にして屈折多く且つ甚だしく迂回せるを以て車道として之を利用するもの殆ど無き有様」（郡誌下,p345）で、急傾斜を人力車（俥）が通れず、やむなく御蔵入りの塗駕籠という真打ちのご登場と相成ったのであろう。その意味で紀行文は「明治道」を車道として利用した貴重な記録ともいえるだろう。

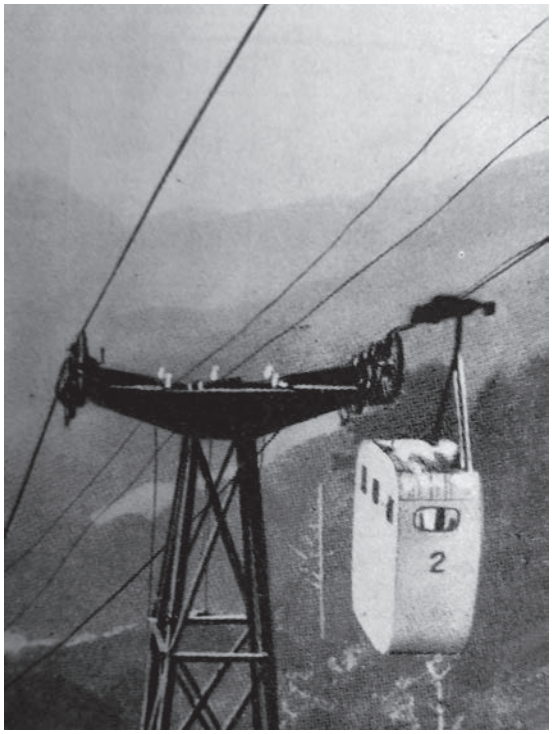
4）筆者が憧れる「矢の川峠」特別の“乗物”

花蹊の「雲の上行く心地こそすれ」を見て素養の乏しい筆者がある錯覚に陥ったのは、僅か10年足らずの間だけ矢の川峠に、本邦初の本格的な旅客用索道であってしかも索道会社ではなく乗合自動車会社が設置し、「単線自動循環式」を採用した最初で最後の「自動車索道」（地元では通常、施工者の名を採って安全索道と呼称）なる世にも奇っ怪な特別の乗り物がごく短期間だけ存在したからである。昭和10年当時の案内書の添付地図を参照すると花蹊が駕籠で越した七曲りに相当する「下（大橋）停留所駅」（尾鷲町二ッ小屋2313番地）と「上（小坪）停留所駅」（同町日尾2907番地）との間が電車（＋＋＋印）状の「自動車索道」56）で結ばれている。

尾鷲と木本の間のバスは大正11年7月「此両地間に自動車開通を見るに至りしも…僅に夏期に於て辛ふじて往復するのみ」（郡誌下,p346）の貧弱極まりない有様で、大正14年1月6日尾鷲と木本とを結ぶ尾鷲所在の紀伊自動車57）が運行を開

始した。バスの運行困難な難所区間に相当する矢の川峠の標高差479mの大橋～小坪間1,185mに安全索道の施工で昭和2年1月着工し、昭和2年5月29日工費7万円で完成、2人乗りで1時間で上下40人を輸送した。58）

かねて矢の川峠など「熊野地方には無数の林鉄・索道群が相互に複雑怪奇に絡まり…超常的な『トワイライト・ゾーン』」（拙著,P124）ゆえ憧れていた筆者は「まさか、お師匠様…よもや幻の旅客索道に乗られたはずはあるまいが…」と仰天した。結局、花蹊が「雲の上行く心地」で乗ったのは年代的には「自動車索道」でなく、「塗駕籠」で急坂を登る実景を詠んだ訳だが、恐らくお殿様並の「雲の上の人」になった気分で昂揚して詠まれたものか…と推測される。お駕籠を召した花蹊の画像が何分にも未探索ゆえ、［図－7］の通称の「安全索道」ではなく「尾鷲旅客索道」と名乗る製造元のカタログ59）写真で我慢頂きたい。前掲案内書グラビアにも「木本尾鷲間にある索道」と題して、観光客と思しき日本髪の女性らが二人乗りの丸型の狭苦しい超小型搬器「2」号、「3」号から物珍しそうにそれぞれ顔を出して支柱を通過していく鮮明な広報用写真60）が掲げられており、当時の観光客にとっても「雲の上行く心地」で乗った特別の乗り物であったことを示している。この二人乗り搬器の“三密”状態に関して当時のお堅い「その筋」では早速「2人が閉ざされた客室で空中を旅行するのは風紀上問題」と目を付けたものの、「乗っている時間が6～7分にすぎず、何をする暇もなかろう」61）と結局お目こぼしになったという笑い話も伝わる。



［図－7］「尾鷲旅客索道」
（カタログ「安全架空索道（第16版）」,p5　筆者所蔵）

なお、熊野にはこの他にも川面を滑走する有名な「飛行艇」（プロペラ船）をはじめ、新宮観光、浦島観光両社の実質は旅館専用ケーブルなのに正式免許された堂々たる地方鉄道2線がかつて存在し、逆に地形図にも載る「湯ノ口温泉駅」と花蹊の乗船地点・入鹿村小川口の近傍「瀞流荘駅」との2駅間約1キロの暗黒空間を有料運行する旧鉱山鉄道線が無許可？で現存するなど、妖しい乗り物が前述の山林王らが敷いた森林鉄道・軌道・索道の他にも数多蝟集し“百鬼夜行”する物恐ろしい霊場でもあった。往生できず彷徨う霊の最たるものが近畿の最高峰・大台ケ原の天然林開発のため大正4年敷設されたが、不況で再起不能に陥って昭和9年頃に錆び朽ち果てた大台林業専用軌道（大台ヶ原牛石～海山町樫山間）であって、今なお深山の奥深く空しく放置されたままと聞く。大正9年12月熊沢一衛・水谷孝三らが設立した大台林業の役員には大台ケ原山麓一帯の山林を所有する土井一族の藤右衛門（次代）の名もあり、強者共の夢の跡を探索し、是非とも回向したい所だが、紙面も尽きた。

VI. むすび

筆者はかつて浦島伝説を敷衍して以下のような「旅」の本質論を試案として提起したことがある。すなわち「旅」とは「日々の労働に明け暮れる現実世界・現世において亀を助けるなど陰徳・善行を積んだごく少数の旅人だけにご褒美として与えられた特別に乗車を許される特殊な『乗り物』に乗って、恰も極楽浄土のような理想的な非現実世界すなわち『非日常』世界へワープする超常的な飛躍・移動」（拙著,Piii）と解した。本稿の花蹊の熊野詣こそ、この条件に美事に叶う羨ましいほど特別な旅ではなかったかと筆者は捉えている。即ち、①目的地が平安貴族も憧れた“霊地”熊野、②乗り物が恰も大名行列を彷彿とさせる“塗駕籠”、③招待・同行者が当地で敬愛される“山林王”土井夫妻、④時期が鉄道国有化直前の巨大私鉄時代の掉尾といった具合である。画家であり、書家であり、和歌を詠み、漢詩を作る教養ある総合的文化人として熊野の絶景と歴史的風土が花蹊の恰好の素材となったことは間違いない。しかし単に風雅の道のみに心を寄せる文人にとどまることなく、固有の歴史・文化・風土の下でその地に生きる人々の生業や世俗的な営みにも興味津々の眼差しを向ける根からの旅行好きでもあったようだ。何ら交通機関が整備されぬ明治期には矢の川の険を徒歩で越えるほかなく、花蹊が幸いにも乗れた亀のような歩みの駕籠こそは正に殿上人待遇のレアな乗り物であったという次第である。

前稿で述べたように、当時花蹊と親交のあった大和田建樹との間では能楽だけでなく、恐らく双方の興味が重なる旅の自慢話にも花が咲いたかと想像される。全国の鉄道唱歌を作詞したほどの“鉄道旅”の達人である大和田の繰り出す旅自慢の聞き手に回らされる側の花蹊が自著に掲載したのが瀞八丁なのも流石の大和田をも唸らせる十八番であったからと想像するのは愉快で

ある。なぜなら離れ小島の如き口絵2の「新宮鉄道線路略図」の新宮〜勝浦間9哩67鎖が全通したのが大和田没後の大正2年3月1日、熊野に国鉄が延びるのは昭和期であったので、大和田でさえも鉄道唱歌を絶対に作詞し得ない鉄道空白地ゆえである。

これを今回採り上げた筆者如きに至っては初めて南紀・熊野三山を旅行62）したのは遥か後年の昭和35年12月25〜29日で、昭和34年7月15日の紀勢本線全通1年半後、当時巻き起こった“南紀ブーム”に追随しただけの安易な産物にすぎない。ただし熊野権現のおわす熊野三山をはじめ、幽寂なる霊地・霊山の連なる熊野には得体の知れぬ「虚偽鉄道」（拙著,P192［図−1］）が蝟集し、その民有林軌道の全貌は未だ明らかでない。［図−8］のような無数の林鉄・索道（拙著,P124 ）群が相互に複雑怪奇に絡まり、局外者には皆目見当が付かぬ熊野地方こそ、筆者にとっては最高の「トワイライト・ゾーン」だと理解している。しかも当該軌道・索道の多くに直接・間接に関与した“山林王”土井一族の直々のご案内で現地を隈無く巡視しているのだから、かかる意味での熊野信仰者たる筆者にとって“お師匠さま”の旅自慢にはほとほと“脱帽”するほかない。

［図−8］　熊野古道の傍らで稼働中の林用索道
（昭和35年12月27日　小雲取越の筆者撮影）

なお本稿のうち「Ⅲ.花蹊の旅程」の章は本来なら日頃から所蔵資料等に関するご研鑽を積んで来られている花蹊記念資料館スタッフ各位との共著とでも表示すべき部分であって、特に、関係資料の探索に全面的なご協力を賜った中出ひとみ氏、同じく資料の所在等についてご教示くださった金玟氏、そして『花蹊手帳』の解読と評釈に多大なるご尽力いただいた加賀谷信子氏に厚く御礼申し上げたい。63）なお本来□□と表記すべき字句を無理に我流で判読した責任等64）は全て筆者の側にある。

1）高橋勝介『跡見花蹊女史伝』大空社、平成元年, P201。なお『花蹊手帳1906』（資料番号1-12）を単に手帳と略したように、以下の頻出資料は略号で本文中に示した。
地誌…野地義智『三重県紀伊国北牟婁郡地誌』明治22年、花袋…雑誌『太陽』初出の明治31年9月「熊野紀行」（『南船北馬』博文館、明治32年,p130以下所収）、事業…『三重県事業史』第九回関西府県聯合共進会三重県協賛会、明治40年、案内…『三重県案内』第九回関西府県聯合共進会三重県協賛会、明治40年、汲泉…『汲泉』跡見校友会（第16号は明治40年6月、第17号は明治40年9月発行）、早苗…「師の君様」宛土井早苗私信（「神のみちびき」『汲泉』17号、明治40年9月,p123所収）、参宮…『参宮案内』参宮鉄道、明治40年5月、要録…『第七版　旅館要録』明治44年、日本…『日本案内　下』開国社、大正5年、興信…『商工興信録　本州中部地方』商工興信合資、大正8年、三重、郡誌…『紀伊南牟婁郡誌』三重県南牟婁郡教育会、大正14年、名鑑…『全国都市名勝温泉旅館名鑑』昭和5年、瀞洞…『瀞洞夜話』昭和28年4月、十津川村教育委員会発行「林宏十津川郷民俗探訪録　民俗4」（https://www.totsukawa-nara.ed.jp/bridge/guide/doro「十津川かけはしネット（十津川探検 〜瀞洞夜話〜」所収）、拙著…拙著『非日常の観光社会学−森林鉄道・旅の虚構性−』日本経済評論社、平成29年、前稿…拙稿「跡見花蹊と大和田建樹の親交−「鉄道唱歌」と跡見校歌「花桜」を結ぶ謡曲「碇引」−」紀要『にいくら』25号、花蹊記念資料館、令和2年3月。
2）跡見花蹊『をりをり草』第4編和歌と紀行、大正4年、実業之日本社,P330〜339には①「瀞峡の一日」（明治40年9月、「瀞峡の一日…花蹊先生紀州旅行談の一節…」汲泉17,P20〜23掲載）と②「紀州瀞峡へ」（明治44年7月、原典未詳）の2本の瀞紀行を収録。①は「星池」記者の前文を除き原文通り転載。
3）拙稿「私鉄『沿線案内』変遷史（1）（2）」『鉄道ジャーナル』198〜9号、昭和58年8〜9月参照。
4）交通博物館・交通科学館編『鉄道唱歌の旅』昭和46年,p175〜188所収。
5）筆者のような旧世代の感覚では昭和30年代の秘境ブーム以前の知床半島のイメージに相当。なお野崎左文『日本名勝地誌　第八編　南海道之部』（博文館、明治31年）には東西南北の牟婁郡を収録。
6）田原慶吉編『紀州熊野遊覧案内』大正9年,P1。地元紙も「商船会社のボロ船を以て紀州航路に充つとの批難は常に吾人の聞く所」（明治42年5月18日『牟婁新報』）と酷評。
7）大阪商船は瀬戸内海航路広告では殊更に「此航路は四時海上平穏にして風波の虞なき」（『汽車汽船旅行案内』明治31年8月、巻末,p8）と謳ったが、大阪熱田線のダイヤでは大阪港を17:00発、3日後の19:00熱田港着（『汽車汽船旅行

案内』明治37年7月,p144）となっており、天候等に左右される長距離外洋航路での大幅遅延は不可避であった。

8）明治37年当時春日丸は大阪商船鹿児島線に就航中（『汽車汽船旅行案内』明治37年7月,p143）。花蹊の乗船した三重丸は明治38年4月25日中島一治の造船所で、和歌山丸は明治38年5月17日永田三十郎（藤永田造船所）で進水（『日本船名録』逓信省、明治40年,P123～4,『大阪商船五十年史』昭和9年）したばかりの各々374と362総屯の新鋭船であった。しかし和歌山丸は乗船僅か3年後の43年5月11日乗客乗員95名を乗せて周参見港に碇泊中、暴風波で流されて座礁沈没し64名の死者を出す大事故を起した。

9）花蹊は『手帳』に単に「急行」と記すが、花蹊が正に乗車した明治40年5月号の『汽車汽船旅行案内』には当該新橋08:00発、平沼08:36発、国府津09:29発の神戸行列車こそ「最急行△」（△印：「食堂車附」）との表示ある当時としては特別な乗り物であった。因みに3年前の明治37年7月号の『汽車汽船旅行案内』には新橋始発の神戸行は09:30発と21:30発の2本のみで共に各停であって、この「最急行」は明治39年4月ダイヤ改正で急行料金を徴収する優等列車として新設された。

10）「岡宗太夫旅館」は「津市旅館…蔵町　岡宗　電話長三七番」（参宮、巻末広告）、「津　和風二階客間十二　B　駅三丁　岡宗」（要録,P31）、「津市　岡宗　館主名　岡宗太夫　電話津37 所在地　蔵町3　客室数12 客室畳数106 宿泊料3.0～4.0円」（名鑑,p361）。なお館主・岡宗太夫家は当地の浜方を支配する「浜年寄」という家柄。

11）明治30年9月宮川電気として特許、35年7月伊勢電気鉄道と改称、36年8月1日開業。40年の「伊勢電気鉄道案内」では山田駅前から乗車、「山田、二見間ハ毎日凡廿六分毎ニ発車ス」（参宮、巻末広告）。

12）「朝日館」の前身・角屋は旧本陣で、大正2年徳富蘆花も利用、「伊勢二見浦の特色…二見浦は山田駅より僅に二里電車の便あり…旅館案内…海水浴 角屋事　朝日館」（参宮、巻末広告）、「二見町　朝日館　喜多六郎右衛門　二見長14　字江　客室数43 客室畳数430 宿泊料3.0～5.0円」（名鑑,p370）。

13）錦浦館は「温浴冷浴の設備を完ふして内外縉紳の来遊に備ふ鳥羽一等の旅亭」（案内,p233）、「鳥羽町　錦浦館　加藤卯之助　鳥羽1、18　駅前通　客室数24 客室畳数306 宿泊料2.5～5.0円」（名鑑,p369）。

14）旧酒甚旅館は栃尾邸などの商家が並ぶ木の本町（現熊野市）本町通りに存在した重厚な造りの和風旅館。

15）油屋は新宮町馬町に所在、経営者は高森清一、電話新宮10番、大正8年8月北白川宮成久王殿下の熊野巡遊の際利用され、中上健次の小説「鳳仙花」にも登場。

16）新宮～那智間の大狗子峠付近の海岸で白菊姫の悲しい伝説が残る美しい「白菊か浜」に立ち寄り、「第四　白菊か浜」（汲泉16,p99）を描いた。この浜には源平の合戦に敗れ熊野に逃れた平維盛を恋い慕う白菊姫はその行方を訪ね歩き、維盛の入水したこの浜に草庵を作って冥福を祈ったという伝説がある。

17）「渚や」は「勝浦…△<旅館>木綿屋、渚屋等名あり」（『旅行案内』明治40年3月号,P71）、「勝浦町　旅館…渚屋（電話15）」（日本,P658）、「元、宮様の別邸跡地で静かな入江」に立つ現「ホテルなぎさや」と同一か。

18）油屋は「昔より近松徳蔵の伊勢音頭恋寝刃即ち油屋騒動福岡貢の十人斬として知られ」（油屋「伊勢参宮乃志る辺」）た「お紺の居た」伊勢古市の老舗・油屋が新たに山田停車場前に「客ハ紳士紳商、待遇誠実」をモットーに新規出店した「油屋支店」で、館主・白井清栄門は三重銀行、参宮鉄道等の役員、町長、『勢海新聞』発行。

19）「ヒヤウゲ峠」とは途中の飛鳥町大又（大俣）・飛鳥町小又（小俣）と目的地・木の本の中間に位置する標高439mの評議峠か。（他にも花蹊は「□□嵜□ハ絶景存し」（手帳）などと耳慣れぬ地名等を盛んに筆記）恐らく地名を耳で聞き取ったが漢字が判らず、即座に正確にカナで「ヒヤウゲ」と記したのであろう。飛鳥町小阪の地元精通者によれば評議峠にはその昔茶屋が二軒も営業していた由（森田秀『小阪の物語』平成6年、私家版）なので「茶屋に憩フ」（手帳）と符合する。なお「日和山」からも「晴天には富士山を望み」（日本,p397）と称され、現に矢の川峠から見えた富士山の画像もWeb上に存在。

20）東久世伯爵は保存会会長として①明治34年9月来遊、②「明治三十九年十月…再び来熊の議ありしが事故を以て之を果さざりし」（郡誌上,p604）とある。

21）会長東久世伯が全国婦人に対して「大方の婦女たち賢妻たち一臂の力を添へ…られむことを」（『教育時論』第656号、明治36年7月,p38）と寄付を呼び掛けた。「花窟保存会は先年来経営拮抗し来りしが、愈々去四月三十日、内務大臣の許可を得て、全国に寄附を募り、以て花窟神社を補修し、神苑を拡張することに決し、寄附募集に着手せり」（同上）。

22）明治40年東が「小学児童に愛樹思想を養成せんが為め山林…を提供」（郡誌下,p65）し小学校用地となった。

23）探訪録の筆者・林宏氏の「我が母の生まれた小川口（紀和町）」「我父も製材所を設け」（「跡見花蹊女史と松の木」瀞洞250）た林業経営者。

24）『和歌山県地誌大観』宮井平安堂、大正12年,P153。

25）『人事興信録　第3版』明治44年と,p3、『同第7版』大正14年と,p13。明治43年木村誓太郎の七男・卓爾を養子に迎えた。父の浦春暉（弘化1.3.2 ～明29.10.6）は明治2年和歌山藩権少属、明治10年弘前裁判所長を経て、明治

15年12月就任した大蔵権大書記官（大蔵省百年史編集室編『大蔵省人名録―明治大正昭和―』昭和48年,P27）として日本銀行開業式で渋沢栄一と共に祝詞を述べた官吏。大蔵省記録局長として明治19年3月9日～明治23年6月25日在勤し、この間明治22年12月『和歌山学生会雑誌』に寄稿、明治26年7月6日「元非職大蔵省記録局長正六位勲六等浦春暉…非職満期等ニテ退官ノ処、何レモ多年勤労有之者ニ付…各位一級進メラレ然ルヘシ」（「叙位裁可書」明治26年）と叙位。

26）跡見校友会『汲泉』第5号、明治35年2月、巻末会員名簿,p2。『女學雑誌』第 263 号、明治24年5月,p364、『貴女之友』第 76 号、明治24年4月,p26。

27）『婦人衛生雑誌』第 84 号、明治29年11月,p25。

28）『旅行案内』明治40年3月号,P1。

29）第9回共進会開催を翼賛して編纂された『三重県事業史』『三重県案内』の中で土井本家の事蹟等が詳しく紹介されており、当然に多大な協賛を行ったはず。

30）『三重県案内記』明治36年,p118。

31）筆者は早苗の礼状にある「さても不便の地はつらきものよと一時にこりさせ給ひ候事と万々推候…松風すさむ海のほとり熊のすむてふ山の奥にも折ふしは都の花をかざし給はん事をひたすらねがひ上候。師の君様」（早苗）の悲痛な結びの文句に、琉球語でいう「島ちゃび」（離島苦）の克服の志しを感じ取った。

32）『瀞峡遊記』明治16年。華涯は明治8年、12歳で単身上京、跡見学校に入学、5年間、跡見花蹊に師事し書画、和歌・漢籍等を学び明治13年第一回卒業生の一人として卒業した。（岩田秀行・小田切マリ編『波多野華涯書簡集　門人濱口梧洞との往復書簡』文学通信、私家版）。なお水谷知生「明治期の風景の成立への出版の影響―瀞八丁を例として―」『地域創造学研究』27（3）、奈良県立大学、平成29年3月参照。

33）稲垣銑子は志摩鳥羽三万石最後の藩主稲垣長敬の一女、号花濃。

34）妹ひさ（明治15年4月生）は紀新銀行取締役・齋藤敬一（南牟婁郡五郷村）夫人（『人事興信録 第8版』人事興信所、昭和3年サ,P71）。

35）41）堀雅通「旅行記にみる井上円了の観光行動と交通利用について」『観光学研究』15号、平成28年3月および原典の井上円了の日記参照。

36）坪谷善四郎『山水行脚』博文館、明治44年,p345。

37）予定していた法務局での土地台帳等の調査が未了のため情報が少なく単なる想像の域をでないが、民宿「やまびこ」等のほかは、①荒物商→「対峡楼」→瀞亭（菅家ないし新宮の写真館の先祖が経営）→戦後廃業取壊。②玉置家→材木商→「あづまや」→「招仙閣」→「瀞ホテル」という2大系統に集約できそうな気がする。なお今一軒の旅舎「瀞亭」の経営者「菅家は平石より分かれて出で来…菅家こそは植林に凝りて破産、まもなく地を去りしも、名士貴顕の宿ともなり…店を開き…当地文化の魁となり…忘るべからざる家なり」（瀞洞）と伝わる。

38）大正末期の国立公園指定運動の一環として、熊野地方でも各地に観光協会の前身ともいうべき保勝会が設立され、南紀保勝会は大阪商船の主導で大正11年、勝浦保勝会は大正12年4月、那智保勝会は大正15年2月各々創立（『那智勝浦町史下巻』昭和55年,p867）され、紀伊保勝会（ないし新宮保勝会）も大正14年ころ創立された。（大正14年8月22日『大阪朝日新聞』）昭和初期プロペラ船会社社長尾崎英吉、郷土史家小野芳彦ら新宮側「瀞峡保勝会」活動も知られるが、別物と見られる明治期の活動実態は未見ながら、当時胎動し始めた「瀞峡保勝会」構想のあり得べき有志団として筆者は土井＝東＝玉置らの顔ぶれを想起した。別府・由布院の例で喩えるなら花蹊は地元の「観光デザイナー」油屋熊八らに招聘され当地に遊び画筆を存分に揮った鳥瞰図の元祖・吉田初三郎画伯の役回りとなろう。

39）『日本全国諸会社役員録』明治33年、下,P90。

40）大林日出雄他『三重県の百年』山川出版社、平成5年,P106。

42）「孫三郎に至って更に山林の経営、植林開墾等に意を用ひ、郷土の模範として家名の大を為すに至れり。明治四十年小学児童に愛樹思想を養成せんが為め山林…を提供し、其他慈善事業にも率先巨費を投じて吝まず…林業家として名あるのみならず亦篤志家、慈善家として広く世に知らる」（郡誌下,p299）。

43）仁井田好古編『紀伊続風土記』（地誌,p349所収）。各家相互には濃密な姻戚関係があり、たとえば藤右衛門四女さやは先代の忠兵衛の妻であった。（『人事興信録　第7版』大正14年と,p13）

44）『大正宝鑑』名古屋商工社、大正2年,p3。

45）『日韓商工人名鑑 上』明治41年、三重,P52。前述の明治40年度税額も同書による。なお当該土井家は養子の次代を含めて北山索道、愛岐電気工業、三重沃度製造、草軽電気鉄道等に関与。

46）第5回内国勧業博覧会は明治36年3月1日～7月31日の153日間、恰もあのEXPO'70と同様に大阪で開催され、最大にして最後の政府主催の内国博となった。

47）「三重県北牟婁郡尾鷲町　土井八郎兵衛　第五回内国博覧会　名誉金牌表彰状」（土井八郎兵衛『林業ノ方法』明治38年、熊野町農会、所収）。

48）同行した鶴子は花蹊の姪（実弟・愛四郎の次女。泰の妹）で、翌41年神戸の法学士神代郁之進に嫁いだ。花蹊自身は今回の旅を「自宅の者も安心して居ります」とあっさり書くが、鶴子の同伴は68歳の年齢を考慮した家族の計らいか。同様に土井早苗が土井家の使用人「三吉」を、山田駅で無事に参宮鉄道の汽車に乗り込むまで、荷物の運搬等の雑役要員を含めて自分に同行させたのも花蹊を気遣ったものか。花蹊側も余分な気遣いをさせまいと、明治36年東京美術学校を卒業し、各地で盛んに写生紀行を実践中の23歳の甥の画家・跡見泰（花蹊の末弟・愛四郎の長男）に鳥羽まで迎えに来させている。

49）「地方に斯（林）業の発展を奨励」した土井家に「町民皆其風に従ひ此盛況を見るに至」（事業,P172）った結果、後年の昭和初期においても地元では「わが土井家は名実ともに尾鷲の殿様」「本家様」「御主人様」（桐井宗雄『三重県の産業と産業人』名古屋新聞社地方部、昭和5年,P89,86,89）などと敬慕されるほど隔絶した“豪家”であったという。

50）明治29年8月着任の三重県知事田辺輝実は「土井家の山林を見て、日本の山林王と歎賞」（日本,p416）した。

51）「駕籠に乗って三千メートルの山登り」『静岡民友新聞』（砂川幸雄『大倉喜八郎の豪快なる生涯』草思社、平成8年,p14～16所収）。

52）泉雅博・植田恭代・大塚博『跡見花蹊:女子教育の先駆者』ミネルヴァ書房、平成30年,p93～94。

53）竹林は宝暦の頃、土井家当主が「薩摩地方ヨリ母竹数種ヲ運搬シ」（地誌,p316）て分植、約4000平方メートルにも広がる見事な竹林に育ったもの。竹林前のトンネルは天明・天保の飢饉の際、土井家のお救い米で餓死せずに済んだ尾鷲浦の人々がお礼に掘ったと伝わる。また教育者としての参観であろう中心街・南浦にある明治9年4月設置の尾鷲尋常小学校は東紀州最古の小学校で「校舎百五十五坪　歳費予算額六百六円十七銭」（地誌,P345）の規模、当然に土井家の貢献もあろう。

54）焼山峠は八鬼山ないし八木山が正当か。「八木山古ハ八鬼山ト書ス…俗称テ七曲リト云フ」（地誌,p330）。

55）嵓（くら）は岩の古語で、山稜や山腹に露出した屏風のようにそびえたつ岩壁をいう。大台ヶ原の大蛇嵓などが著名だが、具体的な地名は未解読で未詳。

56）鉄道省の案内は「紀勢東線三野瀬駅から自動車及び自動車索道の便がある」（鉄道省『紀州』春陽堂、昭和10年,P168）と記すが、紀伊自動車経営索道の意味か。

57）大正5年紀州自動車設立、大正9年尾鷲自動車設立、大正13年両社合併し紀伊自動車株式会社（昭和19年三重交通に統合）となった。代表者夏目有親、資本金5万円、常用車両10両（『全国乗合自動車総覧』鉄道省、昭和10年、三重,P27）。

58）庄山剛史『三重の峠 - 自転車でめぐる峠の魅力』風媒社、平成17年,P201等参照。

59）施工した安全索道（株）のカタログに搬器「2」号の写真が掲げられている。（『安全架空索道　第十六版』,p5）

60）『紀州』鉄道省、昭和10年,P166～7。職業的カメラマンによる“ヤラセ”写真であろうか。

61）齋藤達男『日本近代の架空索道』コロナ社、昭和60年,p44。

62）拙稿「立山・熊野・出羽三山への通過儀礼『初山駈け』の旅」『コミュニケーション文化』12号、跡見学園女子大学、平成30年。

63）当初は現地で確認する“跡見”旅の実現を楽しみにしていたが、居住地に長らくコロナ警報が発令され、各知事等からも高齢者等の外出自粛が強く要請される中、すべて該当する身ゆえ“go to”初利用の夢も潰えた。当時の地元新聞等の紙面も探索していないのかとお師匠様から手抜きのお叱りを蒙りそうだが、当地を限なく調査されている片岡督氏らの『三重県の森林鉄道』（平成25年、私家版）の詳細な研究成果に多くを依拠させて頂いたほか、直接見聞し得なかった現地の近況等は地元有志の方々による以下の如き現地情報サイトに依拠させて頂いた。三重県立熊野古道センター「熊野古道伊勢路とは」、みえ熊野古道商工会御浜支所「御浜町　観光の案内」、「十津川かけはしネット　十津川探検 ～瀞洞夜話～」、『熊野市百科大事典』東紀州ほっとネット くまどこ、やのこ小僧「哀愁の矢の川峠」（順不同）ほか多数検索。

64）花蹊記念資料館所蔵以外の絵葉書・地図等の資料に関して極力原出版者等の現在の継承先を調査致しましたが、不明部分につきお心当りの方はご連絡賜りたく存じます。

附記　本稿の図版のうち、図 - 1、図 - 2、図 - 3、図 - 6は、跡見校友会泉会誌『汲泉』を出典としています。跡見校友会泉会の皆様に厚く御礼を申し上げます。図 - 4の所蔵は跡見学園女子大学花蹊記念資料館です。資料館のご協力に感謝申し上げます。